

安齋 茉由

ANZAI Mayu



みどりの海(free park25)/みどりの海(free park26)/
みどりの海(free park27)/みどりの海(free park28)

油彩、鉛筆、木炭、クレヨン、色鉛筆、カンヴァス

みどりの海(free park25)/みどりの海(free park26)/ みどりの海(free park27)/みどりの海(free park28)

風でなびく田んぼの稲は、どこまでも続きみどりの海のように見える。中学校の3階の音楽室からその景色を見ていた時、もしくはその中に佇むと、自分の存在が風や田んぼへ溶け込み、過去に見ていた時と、現時点で見ている自身が同じで永遠のような一体感を覚えられた。その感覚は子どもの頃、外で走り回って遊んでいた身軽な記憶を思い出させる。今でも故郷の福島で見っていた風景をふと思い浮かべる。

『free park』シリーズはそういった自身が思う自由を描いたものである。思考の時間や、絵の具を何層も重ねて完成させてきていた絵画に、枠に似たようなものを感じていた。制作では枠から自由になる試みとして、画布に線を描いてから裁断し木枠に張ることや、画面内に大きく余白を取り数点を組み合わせ、目が絵画の存在しない部分を補完し、壁にも続きがあるような、絵の枠の自由化をはかった。

「自由」という曖昧で果てしなく範囲が広い言葉は、おそらく子どもの頃からずっと頭の隅にあった。そのテーマは、新型コロナウイルスによる行動規制の家から一步も出られない不自由な時や、作品になるものとそうではないもの、と無意識に線を引き、分けてしまっていたこと、自身が成長し「社会」や「性別」という枠に入れられ何か大切なものを削ぎ落さなければならぬ息苦しさを知った時に明確になった。

無意識に描く落書きや、日記のように自由帳に描きためる落書き、制作するための最初の段階の落書き、公園へ行って描く瞬間的な人物の動きのドローイングは軽やかで、いつも新しい。そういうものには小さい頃、教科書の隅に描いていた落書きと同じ自由さがあった。ドローイングを元にキャンバスへ新たに描くとき、その人物の正確な原型からは変わり、線は何重にも重なり、描いては消し、ペインティングも加わると瞬間的な線は時間によって記憶や知識が定着するように、存在が明確なものになっていく。

自由ということを考えるほど、それは心地良い虚無のようにも思える。自身が今後も生きていく中で感じる些細な事や、そこから浮かぶイメージを表現することによって自由とは何か、自身と見る人に問いかけ見つめ続けていきたい。